

平成 21 年 3 月 31 日現在

研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2006～2008
 課題番号：18730534
 研究課題名（和文）幼児の歌唱行動の発達的研究－教育課程開発のための基礎資料の作成－
 研究課題名（英文）A study of the development of young children's singing behavior

研究代表者
 水崎 誠（MIZUSAKI MAKOTO）
 北海道教育大学・教育学部・准教授
 研究者番号：50374749

研究成果の概要：研究 1 では、歌唱能力が高い幼児は、あまり高くない幼児に比べて、より豊かな音楽的環境のもとで生活していることを明らかにした。研究 2 では、ヘッドセットマイクを用いた録音が、クラス歌唱中に幼児の歌声を個別に録音する方法として適切であることを明らかにした。研究 3 では、クラス歌唱中における個別歌唱の実態を検討し、クラス全体の評定値よりも低い値の者が多くいたことを明らかにした。研究 4 では、分析対象とした各教材曲集の中に幼児の声域に適合した曲はほとんど収録されていないことを明らかにした。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	3,000,000	0	3,000,000
2007年度	600,000	0	600,000
2008年度	200,000	60,000	260,000
年度			
年度			
総計	3,800,000	60,000	3,860,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：カリキュラム構成・開発

1. 研究開始当初の背景

幼稚園教育要領（文部省・1998年）には、「健康」、「人間関係」、「環境」、「言葉」、「表現」の5つの領域が示されている。この5つの領域から、幼児を観察し、発達を促すのが保育である。より望ましい保育のためには、教育課程は必要不可欠である。現在、教育課程は、徐々に開発されつつある。しかし、「表現」に着目した教育課程の開発は、他の領域と比較すると遅れており、今後の研究が望まれている分野である。

「表現」のねらいには「感じたことや考えたことを様々な方法で表現しようとする」と

記述されている。幼児が自分なりに表現するためには、教育課程を幼児の発達に即したものにすることが必要である。つまり、教育課程を開発するためには、幼児の発達を詳細に調査して基礎資料を作成する必要がある。「表現」の場合では、幼児の表現能力について調査しなければならない。本研究は、幼児の表現能力の中で、もっとも重要である音楽的能力の発達について研究する。

幼稚園教育要領「表現」の内容には、「感じたこと、考えたことなどを音や動きによって表現したり自由にかいたりつくったりする」、「音楽に親しみ、歌を歌ったり簡単なり

リズム楽器を使ったりする楽しさを味わう」と記述されている。これらの内容を考慮して、本研究の全体構想としては、幼児の音楽的能力を「歌唱行動」、「リズム行動」、「楽器を演奏する行動」、「音楽を創作する行動」の4つに分け、それぞれの能力について調査し、教育課程開発のための基礎資料を作成する。

今回の研究期間内には、音楽的能力の中で、もっとも重要である「歌唱行動」について限定し、検討する。

本研究の意義について述べる。我が国の保育における音楽活動は、季節や行事に合わせた活動として計画されており、幼児の実態に合わせた活動として計画されることは、きわめて少ないのが現状である。本研究の結果は、我が国における歌唱活動を、幼児の発達に基づいた活動に転換させることにつながると考える。

本研究の独創性について述べる。これまでの歌唱行動研究は、保育のみならず音楽教育学、心理学、音響学などの多くの分野で行われている。これらの研究は、教育課程の開発を念頭においた研究ではない。このため、これまで得られている結果からでは教育課程の開発は困難である。本研究のような教育課程の開発を目指した歌唱行動研究は、これまでの歌唱行動研究の中で独自の位置を占めていると言える。

2. 研究の目的

(研究 1) 歌唱能力が高い幼児とあまり高くない幼児の音楽的環境にどのような違いがあるのか、また音楽の習い事が歌唱能力に有益な影響を及ぼすかどうかを明らかにする。

(研究 2) ヘッドセットマイクを用いた録音が、クラス歌唱中に幼児の歌声を個別に録音する方法として適切であるかを明らかにする。

(研究 3) クラス歌唱中における個別歌唱の実態について、個別の歌声を全体の歌声と関連させて明らかにする。

(研究 4) 幼児の声域に適合した曲が教材曲集の中にどのくらい含まれているのかについて明らかにし、より良い教材曲集を作成するための方法について考察する。

3. 研究の方法

(研究 1) 音楽的環境に関する質問紙調査：北海道函館市内の A 幼稚園に通う年長児を持つ母親を対象に行った。母親自身について、「音楽の習い事の経験」、「歌の好意度」、「歌う頻度」、母親と子どもとの関わりについて、「子どものための CD (カセット) の数」、「昨年度、子どもとコンサートに行った回数」、

「昨年度、子どもとカラオケに行った回数」、「子どもと一緒に歌うことの必要性」、「子どもと一緒に歌うことへの意識」、「子どもと歌う頻度」、および「子どもの音楽の習い事の経験」、以上が質問項目であった。

幼児の歌唱能力調査：A 幼稚園の年長児を対象に行った。「きらきらぼし」を無伴奏で歌唱させて、音声分析ソフトにより、その音程の正確さを測定した。

(研究 2) 北海道函館市内の A 幼稚園の 6 歳児 1 人 (男子) であった。対象児を選ぶにあたっては、次の点を考慮した。通常、対象児が所属するクラスでは、男子横 2 列、その後ろに女子横 2 列で並んで歌っており、本研究の録音の際も通常の並び方に従った。この状況の中で、クラスを中心に並んでいた者を対象児とした。対象児以外の歌声とピアノ伴奏がもっとも多く録音される者は、クラスを中心に位置する者であると考えた。この対象児の歌声が明瞭に録音されれば、対象としなかった者の歌声も明瞭に録音されることは十分に予想される。

録音は、対象児の所属する保育室で行った。録音曲は「さよならぼくたちのようちえん」であった。保育者にピアノ伴奏を弾いてもらい、それに合わせてクラス全員 (約 30 人) で歌ってもらい、対象児の歌声を録音した。なおピアノ伴奏は両手で弾かれた (右手は旋律)。立った状態でクラス歌唱は行われ、保育者による言葉かけはなかった。

(研究 3) 北海道函館市内の私立 A 幼稚園の 4 歳児クラス 15 人と 5 歳児クラス 18 人であった。対象児の歌声を録音するために、ヘッドセットマイク、ポータブルカセットレコーダー、変換アダプターを用いた。クラス全体の歌声は、デジタルビデオカメラで録音した。

録音は、対象児の所属する園の保育室で行った。対象児は、横 2 列に並んだ状態で立って歌った。ヘッドセットマイクを 1 人ずつ全員に装着して、保育者のピアノ伴奏に合わせてクラス全員で歌ってもらった。録音曲は「地球はみんなのものなんだ」(作詞：山川啓介、作曲：いずみたく)であり、調査当時、保育で歌っている歌を保育者に選んでもらった。1 つの歌声に対して、2 種類の 5 段階評価尺度 (「歌唱状況 (どのくらい歌っているか)」と「音高 (どのくらい正確な音高で歌っているか)」) を用いて 3 人の音楽専攻大学生により評価された。

(研究 4) 分析教材曲集の選定にあたっては、編者が特定できない教材曲集は分析対象から除外し、また自作の作品のみを編集した教材曲集は分析対象から除外した。できるだけ多くの出版社から教材曲集を収集したとこ

ろ、8つの出版社から計13冊を分析対象として選定した。その教材曲集とは次の通りであった。曲集1:小林(1975)『こどものうた200』、曲集2:大石ら(1980)『楽しい歌とあそび』、曲集3:浜田・山内(1993)『園児の四季とみんなの歌』、曲集4:小林(1996)『続こどものうた200』、曲集5:磯貝ら(1998)『みんなでうたおうこどもの歌』、曲集6:楠(1998)『幼児保育の歌とリズム』、曲集7:繁下(2001)『幼児のうた130選』、曲集8:右近(2002)『幼児の歌12ヵ月』、曲集9:東(2005)『幼児のうた』、曲集10:井上(2005)『こどものうた12ヵ月』、曲集11:石丸ら(2005)『大好きな歌の本』、曲集12:矢田部(2006)『こどもの175』、曲集13:伊藤ら(2007)『幼児の歌110曲集』であった。

各教材曲集の分析曲は、音高が明確に楽譜で示されている曲のみを対象とした。リズム譜だけ、楽譜は示されているが通常の音符ではなく符頭に×もしくは◇の音符で示されている曲は分析から除外した。

4. 研究成果

(研究1)歌唱能力が高い幼児は、あまり高くない幼児に比べて「コンサートにより多く参加していること」、「カラオケに行くものが多いこと」、および「母親が子どもと歌うことに対してより必要であり、より良いことだと考えていること」が明らかにされた。なお、歌唱能力が高い幼児とあまり高くない幼児では、母親が幼児と歌うことについての意識については差があったが、実際に歌う頻度についての違いはあまりなかった。この結果が、本研究の結果のみに限ったことなのかどうかは、今後の課題として検討する必要がある。なお、音楽の習い事をしている群としていない群の正確な音程で歌った箇所との平均値に有意差は認められず、音楽の習い事をしていることが歌唱の正確さに有益な影響を及ぼす可能性は低いことが示された。

(研究2)音声分析画面からは、対象児の歌声のみが示され、つまり対象児以外の歌声や伴奏の音が描かれることはなかった。対象児の歌声が明瞭に録音されていることと対象児以外の歌声とピアノ伴奏がきわめて小さな音量で録音されたため、音声分析ソフトの処理の対象にならなかったことを示している。

ヘッドセットマイクによって、伴奏付きクラス歌唱中の個別の歌声を適切に(音声分析ソフトによって分析できるほど明瞭に)録音できることが明らかになった。

(研究3)4歳児の「歌唱状況」では、全体(4.67)よりも低い値の者は15人中10人であり、この10人中で全体よりも1以上低

い値の者は5人であった。音高では、全体(3.67)よりも低い値の者は15人中13人であり、この13人中で全体よりも1以上低い値の者は10人であった。

5歳児の「歌唱状況」では、全体(5.00)よりも低い値の者は18人中7人であり、この7人中で全体よりも1以上低い値の者は3人であった。音高では、全体(3.67)よりも低い値の者は18人中14人であり、この14人中で全体よりも1以上低い値の者は11人であった。

これらの結果から、個別の歌声ではクラスの歌声よりも低く評定された者が多くいることが明らかになった。この結果は、クラスの歌声のみに着目して歌唱活動を行うことが、望ましくないことを示すものである。保育者はクラス歌唱において、クラス全体だけではなく、歌えていない幼児もいる可能性があると考えて、個別の歌声に着目して歌唱活動を行う必要があると言える。

(研究4)吉富(1983)で明らかにされた幼児の「歌唱可能声域」に適合した曲が、各教材曲集の中でどのくらい収録されているのかを検討した。4歳児の声域はA3~G#4であり、収録曲数の割合は、曲集1=0.5%、曲集2=0.7%、曲集4=5.2%、曲集6=0.7%、曲集7=0.8%、曲集9=3.0%であり、その他の曲集は皆無であった。5歳児の声域はA3~B4であり、収録曲数の割合は、曲集1=11.4%、曲集2=14.0%、曲集3=6.1%、曲集4=27.8%、曲集5=9.0%、曲集6=8.8%、曲集7=4.6%、曲集8=19.2%、曲集9=14.1%、曲集10=4.4%、曲集11=13.5%、曲集12=11.0%、曲集13=5.5%であった。

以上の結果から、幼児の声域に適合した音域の曲は、もっとも多い割合で4歳児5.2%、5歳児27.8%であり、その割合は低いことを明らかにした。教材曲集の音域が幼児の声域に不適合である状況は、先行研究(吉富、1980;小川ら、1995;岡村・原、1996)から変わっていないと言える。幼児の声域に適合した曲をほとんど取っていない現在の状況では、保育者が適切な曲を選択したくてもできないことにつながり、望ましいとは言えない。より良い教材曲集の作成のために2点を提案する。1点目は、童謡データベースや全集などを用いて、幼児の声域に適合した音域の狭い曲を広範に探し、それを収録することである。2点目は、移調によって幼児の声域に適合した音域の曲にして収録することである。音域そのものが狭く、移調すれば幼児の声域に適合する曲もある。これらを探して、適切に移調して教材曲集の中に収録するのである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 3 件)

- ①水崎誠, 日本の保育歌唱教材曲集について
— 幼児の声域からの検討 —, 国際幼児教育研究, 15 号, 13~20, 2008, 査読有
- ②水崎誠, 幼児の歌声を録音する新しい方法,
全国大学音楽教育学会研究紀要, 19 号, 1
~10, 2008, 査読有
- ③水崎誠, 家庭の音楽的環境と音楽の習い事
— 幼稚園児の歌唱能力との関連 —, 音楽文化教育学研究紀要, X X, 21~28, 2008,
査読無

[学会発表] (計 7 件)

- ①水崎誠, クラス歌唱中における個別歌唱の実態—幼稚園児を対象として—, 日本教科教育学会第 34 回全国大会, 2008 年 12 月 6 日—7 日, 宮崎観光ホテル
- ②水崎誠, 日本の手遊び教材曲集について,
国際幼児教育学会第 29 回大会, 2008 年 11 月 14 日—16 日, サザンプラザ海邦
- ③水崎誠, 子どもの歌声を聴く, 日本音楽教育学会, 2007 年 11 月 20 日, 岐阜大学
- ④水崎誠, 幼児の個別歌唱における音高・音程の問題 (3), 全国大学音楽教育学会北海道地区学会, 2007 年 8 月 4 日, 北海道教育大学旭川校
- ⑤水崎誠, 幼稚園年長児の歌唱能力に家庭の音楽的環境が及ぼす影響, 日本保育学会第 60 回大会, 2007 年 5 月 20 日, 十文字学園女子大学
- ⑥水崎誠, 幼児の個別歌唱における音高・音程の問題 (2), 日本音楽教育学会北海道地区例会, 2007 年 3 月 17 日, 北海道教育大学函館校
- ⑦水崎誠, 我が国における声域研究の展望,
日本教科教育学会第 32 回全国大会, 2006 年 12 月 2 日, 大阪教育大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

水崎 誠 (MIZUSAKI MAKOTO)
北海道教育大学・教育学部・准教授
研究者番号: 50374749

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者